

ベンガルのバウルの文化人類学的研究(1)

村 瀬 智

An Ethnographic Study of the Bauls of Bengal(1)

MURASE Satoru

目次

はじめに

1. 序論

- 1-1. 研究の目的
- 1-2. 研究対象の概略
- 1-3. 研究方法
- 1-4. フィールドワーク
- 1-5. ベンガル語のカタカナ表記

はじめに

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」とよばれる宗教的芸能集団の民族誌である。本研究は、本誌に数回にわたって連載される予定である。

1. 序論

1-1. 研究の目的

詩人タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941)¹⁾ が、20世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風がわりな歌」とみなされていたバウルの歌が再評価されるようになった。²⁾ タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきの歌集として出版された。³⁾ また、ベンガル文学、インド宗教史、インド音楽などの専門家がバウルの歌やバウルの宗教、あるいはバウルの音楽について論じてきた。⁴⁾ もちろんこれらの研究は、バウルについてのわれわれの理解におおいに貢献したのであるが、そこには「人間としてのバウル」を専門的に紹介しようとした民族誌的文献は、事実上、皆無である。本研究の第1の目的は、この学問的空白をみたくすることにある。

インドの社会をもっとも顕著に特徴づけているのはカーストである。カーストというと、日本ではインド古来の四種姓、すなわちバラモン (司祭階級)、クシャトリヤ (王侯・戦士階級)、ヴァイシャ (農牧商など庶民階級)、シュードラ (隷属民) の意味に理解されることが多い。インドではこの種姓を「ヴァルナ」(本来「色」の意) とよんでいる。⁵⁾ しかし、インドにおいて日常生活に直接かかわりをもつ組織は、ヴァルナではなく、「ジャーティ」(「生まれ(を同じくする者の集団)」) である。このジャーティを、16世紀中頃にインドにきたポルトガル人が、自国語で「家柄」「血統」を意味する「カスタ」(casta) と

- 1) 近代ベンガル最大の文学者、思想家、教育者。コルカタ (カルカッタ) 生まれ。家はベンガル地方の名家で、父デヴェンドラナート (Devendranath Tagore 1817-1905) はインド近代宗教運動に重要な役割を果たした宗教思想家。恵まれた環境のなかでインド古典を学び、イギリス留学などを通じて西欧ロマン派文学に親しんだ。1890年から約10年間、父に農村の土地管理をまかされ、ベンガルの農村文化にふれる機会をもつ。このときの体験から1901年、父の宗教実践の地シャンティニケータンに実験的な寄宿学校を設立し、ここを拠点に自然のなかでの全人教育と農民の精神的・経済的自立を目ざす農村改革運動をすすめた。1910年詩集『ギーターンジャリ』(「歌の捧げもの」の意) を刊行、12年これを英訳してイギリスで発表、絶賛をうけ翌13年、東洋人として初めてノーベル文学賞を受賞した。タゴールはノーベル文学賞の賞金を学校運営にあて、同校は1918年、東洋と西洋との相互理解の促進をめざすヴィシュヴァ・バーラティ大学へと発展、インド独立後の51年には国立大学となった。
- 2) バウルを紹介したタゴールの著作については、[Thākūr 1905, Tagore 1922, 1931] を参照。また、19世紀後半のベンガル社会におけるバウルに関する記述については、[Datto 1870-71: 168] [Bhattacharya, J. N. 1995 (1896): 381-382] を参照。
- 3) バウルの歌の代表的な歌集については、[Mansur-Uddin 1942] [Bhattacharya, U. 1958, 1981] [Das and Mahapatra 1958] を参照。また、英訳歌集については、[Bhattacharya, D. 1969] を参照。
- 4) たとえば、[Sen 1931, 1949, 1956, 1961] [Dasgupta 1969] [Dimock 1959, 1966] [Mahapatra 1972] [Capwell 1974, 1986] [Salomon 1979] [Karim 1980] [Chakravarti 1980] [McDaniel 1989] [Ray 1994] を参照。また、日本人研究者による文献については、[小西 1974] [大西 1984a, 1984b, 1984c, 1984d, 1984e] を参照。
- 5) シュードラのさらに下には、4 ヴァルナの枠外におかれた不可触民が存在した。彼らは、4 ヴァルナに属する一般住民に穢れを与える存在とみなされ、「触れてはならない」人間として社会生活のすべての面で差別されてきた。不可触民は、ベンガル語で「オスプリッシュョ」、ヒンディー語で「アチュート」、英語で「アンタッチャブル」などとよばれた。またカースト差別撤廃を目指したガンディーは、彼らに「神の子」を意味する「ハリジャン」という呼称を与えた。今日では「不可触民」を意味する差別用語は使用されず、公式には「指定カースト」(scheduled caste) と称される。

いう語でよんだ。そのことが起源になり、英語に派生して「カースト」(caste)という語が生まれた。

ヴァルナとジャーティには共通した性格(内婚、世襲的な職業との結合、浄・不浄観にもとづく上下関係)が認められる。しかしヴァルナが社会の大枠を示したものであるのに対し、ジャーティは地域社会の日常生活において独自の機能を果たしている集団(床屋のジャーティ、洗濯屋のジャーティ、鍛冶屋のジャーティなど)であり、その数はインド全土で2000以上にもおよぶ。不可触民のジャーティを除くと、すべてのジャーティが四つのヴァルナのいずれかに属する。このようなヴァルナの枠組みと、その内外に存在するジャーティ集団を含む制度全体をカースト制度という。

インド社会の近代化とともに、カースト制度は緩んできたとはいえ、いまだにヒンドゥー教徒の職業や結婚、食事などの行動をきびしく規制している。ところが、世俗のヒンドゥー教徒の生活と密接にかかわりながら、「世捨て人」(現世放棄者)が、インドの社会的景観の不可欠の部分として、何千年も存在しつづけているという事実は意外とみすごされてきた。

インドという複合社会の構造全体の維持にはたす「世捨て人」の役割の重要性に注目したのは、おそらくデュモンが最初であろう。彼は、「ヒンドゥー教の秘密を解く鍵は、世捨て人と世俗内人間との対話のなかに発見されるだろう」と洞察し[Dumont 1960: 37-38, 1998: 270]、カースト制度と世捨ての制度とのあいだには、社会全体の均衡をたもとうとする弁証法的関係が成立していると仮定し、「カースト制度というものが、それに矛盾する世捨てとは別個に存在し、また持続できたかどうか疑ってみるがよい」と主張している[Dumont 1970: 186]。

古代インドでは、「ダルマ」(宗教的義務)を遵守すること、「アルタ」(実利)を追求すること、「カーマ」(愛、とりわけ男女間の性愛)を充足することが人生の三大目的とされ、この三つを充足しつつ家庭をいとなみ、子孫をのこすのがひとつの理想とされた。また一方では、とくにウパニシャッド思想以降、世俗の世界を放棄し、乞食遊行(こつじきゅぎょう)しつつ苦行や冥想によって輪廻から脱却すること、すなわち「モクシャ」(解脱)を達成することが宗教の最高目標とされた。

中世以降、神への絶対的な帰依を内容とする「バクティ」(信愛)の思想が展開し、ヒンドゥー教は大きく変化した。⁶⁾しかし現代においても、カースト社会に生きる世俗の人

6) バクティの概念を前面に打ち出したのは『バガヴァッド・ギーター』が最初であるが、ここによく、ヴェーダ以来の正統的宗教が一般民衆に開かれたものとなり、ヒンドゥー教が急速に展開する基盤が形成された。ヴェーダの祭式は、王侯や司祭階級バラモンの独占するところであり、ウパニシャッドに説かれる「梵我一如」の思想は、知的エリートにのみ可能であった。しかしバクティの概念により、女性や低カーストの男性も救済可能となったのである。その後、人間の努力の価値を否定し、ただひたすら神に身をゆだねることこそが、バクティにほかならないとする考えがしだいつよくなり、中世インドのいわゆるバクティ運動を濃厚に彩ることになった[宮元 1992: 544-545]。

びとにとって、世捨て人は相反する生活様式を採用した人であるが、「究極の理想を追求する人」として存在しているのである。そして世俗の人びとは、世捨て人に食べ物や金などを施与し、彼らの生存を保証しているのである。それは世俗の人びとにとっての「スヴァ・ダルマ」(本分)とされているのである。

本研究の第2の目的は、ベンガルのパウルの民族誌的記述と分析を通じて、カースト制度と表裏一体の関係にある「世捨て」を考察し、現代インド文明の構造的理解に寄与することである。

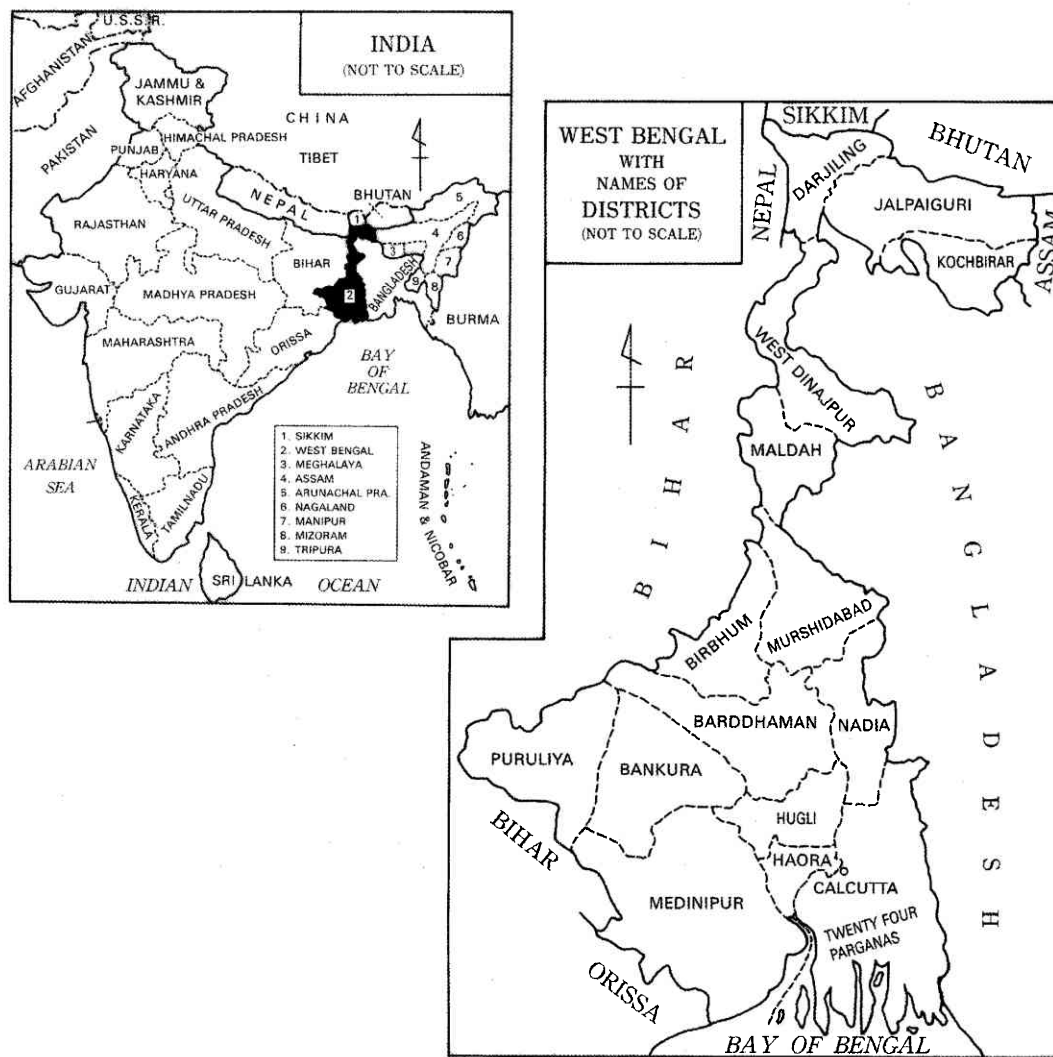


図1：インドおよび西ベンガル州

出典：Tourist Map of West Bengal.

1-2. 研究対象の概略

バウルのベンガル社会にあたえているイメージは、わざと社会の規範からはずれようとする狂人のイメージである。バウルはカーストやカースト制度をいっさいみとめない。またバウルは偶像崇拜や寺院礼拝をいっさい行わない。彼らの自由奔放で神秘主義的な思想は、世間の常識や社会通念からはずれることがあり、人びとからは常軌を逸した集団とみなされることがおおいのである。実際に、ベンガル語の「バウル」という語は、もともと「狂気」という意味である。そしてその語源は、サンスクリット語の“*vātula*” (affected by wind-disease; mad, crazy)、あるいは“*vyākula*” (intently engaged in or occupied with; impatiently eager; confused, disordered) に由来するようである [Chatterji 1986: 342, 423, 513]。

バウルの歴史がどこまでさかのぼれるかは不明である。しかし、中世のベンガル語の文献では、バウルという語は、牛飼いのゴピーがクリシュナに恋をしたように、「(神に恋をして) 狂気になった人」という意味でつかわれはじめている。たとえば、16世紀のベンガルの熱狂的な宗教運動の指導者⁷⁾チョイトンノ(チャイタニヤ Caitanya 1485-1533)の伝記には、「我、クリシュナのはてしなき甘露の海にさまよい、狂気(バウル)となれり」といったような文脈でしばしばでてくる [Sen and Mukhopaddhaye 1986: 325]。しかしバウルという語が、そのころに狂人のような宗教的態度の「個人」をさしていたのか、あるいは「宗派」としての意味をもちはじめていたのかどうかは、まったくあきらかでない。

現代のベンガルでは、バウルという語にはまだ、「狂気」というふかい意味がひそんでいるが、その語はもっぱら「バウルの歌と音楽を伝承する一群の人びと」、あるいは「バウルの歌と宗教を伝承する一群の人びと」をさす、とってさしつかえない。しかし、その「一群の人びと」が、いったい何人いるのかあきらかでない。インド政府が10年に一度行う国勢調査の数字にあらわれてこないほど、バウルは少数である。それにもかかわらず、バウルはベンガル社会で、はっきりと目立つ存在なのである。

バウルがベンガル社会で目立つのは、彼らのライフスタイルが、一般のベンガル人のそれとは根本的に異なっているからである。そのちがいは、「生活費の稼ぎ方」である。

バウルは、世俗的な意味で非生産的である。彼らは農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などに、いっさい従事していない。バウルは、一般のベンガル人に経済的に依存し「マドゥコリ」をして生活費を稼いでいるのである。ベンガル語の辞書は、「マドゥコリ」という語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物ごいをして歩くこと」

7) ベンガルのヴィシュヌ派(チョイトンノ派)の開祖。真のヴィシュヌ教徒は、ひたすら神にすがるべきであるとし、カーストの区別なく入信を許した。弟子とともに賛歌(キールタン)を合唱し、太鼓やシンバルにあわせて歌い踊る詠歌行進を行い、クリシュナとラダーを崇拜する熱狂的な宗教運動を指導した。晩年にはますます神へのバクティ(信愛)をつよめ、ほとんど狂人ようになった。

と説明している。⁸⁾すなわち、ベンガルのバウルとは、「みずからバウルと名のり、バウルの衣装を身にまとい、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことである。バウルは、世捨て人のようなゲルア色（黄土色）または白色の衣装を着て、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのである。⁹⁾

マドゥコリの生活は、バウルが選択したライフスタイルである。彼らは、世捨て人のようなライフスタイルを採用し、バウルになったのである。しかし厳密にいうと、わたしの面接したすべてのバウルが、完全に世俗の生活を放棄していたとはいえない。また、すべてのバウルが世捨て人としての自覚をもっていたとも思えない。それにもかかわらず、マドゥコリの生活は、すべてのバウルに共通のライフスタイルであり、そのことが彼らをほかのベンガル人から区別しているのである。したがって、すべてのバウルをベンガル社会のひとつの「構造的分節の構成員」とみなし、彼ら全員を研究対象とすることは、バウルの文化人類学的研究として有効である。

インド・パキスタンの分離独立以降のベンガル社会の急激な変化は、バウルの性格を複雑なものにしている。ベンガル社会の近代化に呼応するように、一部のバウルはマドゥコリの生活をやめ、「プロの音楽家」としての道を歩みはじめたのである。彼らは音楽チームを組織し、バウルの歌を音楽会でしか演奏しなくなった。また、音楽教室を開設し、アマチュアの音楽愛好家にバウルの歌や音楽を教えるようになった。彼らは、契約による出演料や授業料によって生活費を稼ぐようになったのである。マドゥコリをしない彼らは、もはやバウルではないのかも知れない。しかし彼らは、みずから「バウル」と名のり、他者からも「成功したバウル」とみなされているのである。このような新しいタイプのバウルの出現は、ベンガルのバウルを動態的に考察するうえで重要である。したがって、プロの音楽家の道を歩みはじめた一部のバウルを研究対象から除外しない。

1-3. 研究方法

1983年5月、わたしはベンガルのバウルの文化人類学的研究の予備調査をはじめようとしていた。当時、わたしのベンガル語会話能力はまだ不十分だったので、ベンガル語による質問を20項目ほど準備した。それらの質問は、バウルとわたしが互いに誤解しないように、単純な構文のものにした。たとえば、「あなたの名前は何ですか?」、「あなたはどこに住んでいますか?」、「あなたのお父さんはバウルですか?」、「あなたの兄弟はバウルで

8) Mādhukārī: act of begging from door to door like the bee gathering honey from flower to flower. (*Samsad Bengali-English Dictionary*. Fifth Edition, 1987.)

9) 手元の国語辞典（『新明解国語辞典』第5版、1997）は、「門づけ」を「人の家の門口で歌をうたうなどの芸をし、お金や食べ物をもらって歩くこと」と、また「たく鉢」を「僧尼が修業のため鉢をもって経文を唱えながら人家を回り、米・お金をもらって歩くこと」と説明している。

すか?」、「あなたのお父さんのお父さんはバウルですか?」、「あなたのお父さんの兄弟はバウルですか?」、「あなたのお母さんはバウルですか?」、「あなたのお母さんのお父さんはバウルですか?」、「あなたのお母さんの兄弟はバウルですか?」などである。このような、本人との関係を示す親族名称を使用し、ほとんど「はい/いいえ」で答えられるような簡単な質問ではあったが、インタビューのテープをおこし、資料を整理しているうちに、その後の研究の方向を決定するような重大な結果が得られたことに気づいた。

予備調査の結果は、つぎの2点に要約できる。(1)すべてのバウルがバウルの家庭に生まれたわけではない。(2)バウルの家庭に生まれたすべての人がバウルになるわけではない。つまり、ベンガル社会の「一群の人びと」が、マドゥコリの生活を採用し、「バウルになった」のである。これは彼らが選択したライフスタイルである。バウルになるか、ならないかは、本人の意思が大事なのである。予備調査の結果は、インドのカースト社会を勉強してきたわたしにとって新鮮なおどろきであった。そして、バウルの文化人類学的研究を、彼らのライフヒストリーから接近するという方向に導いたのである。

バウルの文化人類学的研究を、ライフヒストリーからアプローチするという方法は、もっとも有効な研究方法だと思われる。なぜなら、バウルのライフヒストリーは、人びとの行動を規制するカースト制度がいまだに根強いベンガル社会の、「だれが」「なぜ」「いつ」「どのように」マドゥコリの生活を採用し、「バウルになったか」を、語っているはずだからである。また、ライフヒストリーの個々のケースは、バウルになった動機や要因の幅ひろさだけでなく、彼らがバウルになってからの適応戦略の多様性も反映しているはずである。さらに、バウルのライフヒストリーは、彼らが自分の人生をどのように意味づけているかをも、語っているはずである。

バウルの研究をライフヒストリーから接近するという研究方法の重要性にもかかわらず、この種の資料収集はしばしば困難をとめない、また時間のかかるものだった。正直に言って、わたしは詳細なライフヒストリーを期待したほど収集できなかった。また、わたしが記録したライフヒストリーのおおくは、個々のバウルが語った断片をつなぎあわせた短い物語にすぎない。彼らが人生について広範囲に語りだすまで、しばしば数ヵ月を要した。そして、わたしとかなり親密になっていたにもかかわらず、自分の人生を語ることにはいっさい応じないバウルも、何人かいた。

インタビューを依頼するとき、わたしは自分が何者で、何をしたいとおもっているかを、正確につたえるように努力した。わたしは、彼らのライフヒストリーを聞きだす前に、わたし自身を彼らに語ったのである。彼らは、わたしの語りにつよい興味をしめした。しかし、彼らはしばしば、なぜわたしが他人の人生について興味をもつのかと、逆に質問した。そして、そのような他人の過去についての知識は、わたし自身の人生にまったく役にたたないばかりか、むしろ害になると警告した。それでもわたしは、16世紀のベンガルの宗教

運動の指導者チョイトンノを話題にし、チョイトンノの伝記には彼の人生に関する物語がたくさんあるではないか、そしてそれらの物語を読んだり聞いたりすることは、チョイトンノの思想をふかく理解したいとおもっている人にはたいへん刺激的で有益ではないかと、ひるまずに反論した。これは、彼ら自身に人生を語る気にさせる効果的なテクニックとして、ときには有効であったが、いつも成功したわけではない。

バウルが自分の人生を語るのに消極的だった主要な理由は、彼らがマドゥコリという「世捨て人の生活様式」を採用していることによるだろう。「ベック」という「世捨て人の身分への通過儀礼」を通じて、ひとりの人間は、以前の社会的な属性を失い、世を捨てたバウルとして生まれかわったのである。実際、この通過儀礼を受けたバウルは、彼らの以前の社会的な地位や身分をわすれるようにと、グル（導師）から指導されているのである。そしてこの通過儀礼をまだ経験していないバウルにとっても、自分の人生についておおくを語らないことが、彼ら自身の適応戦略となっているようである。

バウルが自分自身のことを語るのに消極的だったもうひとつの理由は、バウルの宗教の秘密主義的側面と関連があるだろう。

バウルの宗教は、タントリズムの流れを汲むサハジーヤ派¹⁰⁾の思想やヨーガの修行法、イスラム神秘主義など、いくつもの宗教的伝統の影響を受けている。しかしバウルの宗教の核心的な部分は、「サドナ」とよばれる宗教儀礼の実践にある。そして、この実践的なサドナのすべては、「人間の肉体は真理の容器」という信仰にもとづいている。バウルはこの信仰のことを「デホ・トット」とよんでいる。

この信仰をもうすこし整理すると、ふたつの原理に分解できる。(1)人間の肉体は、宇宙にあるひとつの「もの」であるだけでなく、宇宙の「縮図」である。(2)人間の肉体は、神の「すみか（住処）」であるばかりでなく、神を実感するための唯一の「媒介物」である。つまりバウルは、人間の肉体を小宇宙とみなし、みずからの肉体に宿る神と合一するために、みずからの肉体を駆使してサドナを実践するのである。このサドナには、ヨーガの呼吸法や座法を通じて行われる性的儀礼や、宇宙を構成する五粗大元素（すなわち「地」「水」「火」「風」「空」）を、人間の器官や分泌物にたとえて行われる儀礼などをともなう。そして、サドナに関することがらは、もっぱらグルから弟子へ、こっそりと伝えられるのである。

いずれの理由にせよ、ふだんは多弁なバウルでも、話題が彼らの人生や宗教生活におよぶと、とたんに寡黙になるのである。ライフヒストリーの聞き手であるわたしは、ライフヒストリーを聞く前に、語り手との絶え間のない、しかも長期にわたる親密な関係をきずきあげる必要があった。このように、バウルは研究対象として手ごわい相手であったけれ

10) サハジーヤ派の思想およびその歴史的展開については、ボース [Bose 1986]、ダスグープタ [Dasgupta 1969]、ディモック [Dimock 1966] を参照。

ども、わたしは数編のかなり詳細なライフヒストリーと数十編の伝記風のスケッチを、なんとか採集することができた。¹¹⁾しかし、個々のバウルの人生のドラマの「舞台裏」まではいりこむのは、けっして容易なことではなかった。

テープレコーダーを利用したインタビューに応じてくれたのは66名である。このうち、男性の「バウル」は59名、女性の「バウリニ」は5名である。これに加えて、以前バウルだったが現在はそうでない「元バウル」が1名、そしてバウルのグルに入門し、サドナの実践に努力する「在家の信者」が1名存在する。インタビューのテープ起しは、わたしのベンガル滞在中にすべて行った。

1-4. フィールドワーク

本研究の資料は、1983年以来、断続的に10回にわたって滞在したインド・西ベンガル州における文化人類学的な調査による。滞在期間は合計約34ヵ月で、それぞれの調査期間は、①1983年5月から8月まで、②1985年5月から8月まで、③1987年6月から1989年1月まで、④1992年2月から3月まで、⑤1998年7月から9月まで、⑥1998年12月から1999年1月まで、⑦1999年7月から9月まで、⑧2002年8月から9月まで、⑨2003年8月から9月まで、そして⑩2004年7月から8月までである。予備調査は①と②で、本調査は③で、そして補足的調査は④⑤⑥⑦⑧⑨⑩で行なった。

本調査は、もっとはやい時期に行なうつもりでいた。遅くとも1984年末までにインドに入り、すぐにフィールドワークを開始するつもりでいた。ところが、肝心のインド政府の調査許可がなかなかおらず、やきもきしながら日本の正月を3回も過ごすことになってしまった。しかし、そのおかげで予備調査を2度も行なうことができたし、2度目の予備調査では、短期間ながらバングラデシュにも旅行できたと思っている。

1987年2月、やっとインド政府の調査許可がおりた。インドでのわたしの身分は、シカゴ大学に本部事務局をおくAIIS (American Institute of Indian Studies) の、在インド特別研究員だった。インド側の受け入れ機関はカルカッタ大学で、そこでのわたしの身分は、南および東南アジア研究センター (Centre for South and Southeast Asian Studies, Calcutta University) の客員研究員だった。

当初、本格的な調査には、2年間のフィールドワークを予定していた。しかし、インド政府の調査許可書の発給が遅れたこともあって、フィールドワークを1年半に圧縮し、調査計画を全面的に練りなおした。圧縮したのは、フィールドワークの初期の段階に処理しなければならない部分で、これに手間取ると調査全体に影響をおよぼすと思った。すなわち、(1)わたし自身のベンガル社会への定着をいかに手際よく行うか、(2)わたしのベンガル

11) バウルのライフヒストリーについては拙稿 [村瀬 1999, 2000] を参照。

語会話能力をいかに首尾よく向上させるか、そして(3)リサーチ・アシスタントのトレーニングをいかに効率的に行なうかである。これらの課題のすみやかな処理に、フィールドワークの成否がかかっていた。

フィールドワークの本拠地として、ビルブム県ボルプール市に隣接するシャンティニケータンを選んだ。ボルプールは、コルカタ（カルカッタ）の北西約140キロ、列車で約3時間の距離の地方都市である。シャンティニケータンは、詩人タゴールが創立したヴィシュヴァ・バーラティ大学の所在する閑静な町である。シャンティニケータンをフィールドワークの本拠地とすることは、83年夏の予備調査のときから考えていた。その理由は、(1)ボルプール・シャンティニケータン地域だけでなく、近隣の村々にも多数のバウルが住んでいること、(2)鉄道駅やバスターミナルに近く交通の便がよいこと、(3)大学町なのでリサーチ・アシスタントの確保が比較的容易であること、(4)外国人にとっても住みやすいこと、などである。

そのシャンティニケータンで、幸先よく借り手を探している家を見つけ、その日のうちに契約をむすんで借りた。正確にいうと、大きな屋敷の離れ家を借りた。家主はヒन्दゥー教徒で、一家はこの屋敷の母屋を別荘として使用していたので、不在のことがおおかた。しかし、管理人とその家族が、屋敷のとなりに住んでいた。管理人はムスリムの老紳士で、近所のヒन्दゥー教徒からも「チャチャ（おじさん）」とよばれて親しまれていた。管理人の家族はみんな親切だった。屋敷には専属の庭師もいた。屋敷の手入れは、すみずみまで行き届いていた。屋敷には「プラバート・クシュン」という、ひびきのよい名前がついていた。それは、「夜明けにさく花」という意味で、タゴールの詩の一節から引用したという。屋敷の名にふさわしく、庭にはいつも花がさいていた。バウル相手のフィールドワークの本拠地として、理想的な環境だった。

ヴィシュヴァ・バーラティ大学の日本学科長は、山下幸一さんだった。山下さんとはじめて会ったのは87年7月上旬だったが、その2年ほど前から、おたがいに名前だけは知っていた。そして、おたがいに会いたいと思っていたので、会ったとたんに意気投合した。山下さんは、わたしのフィールドワークに全面的協力を申し出てくれたので、わたしは、熱心なベンガル語教師と献身的なリサーチ・アシスタントをすぐに紹介してほしいと、勝手な注文をした。

わたしのベンガル語教師は、シュミタ・バッタチャルヤさんという美人で魅力的なベンガル人女性である。シュミタさんは、山下さんの同僚のまな弟子で、ヴィシュヴァ・バーラティ大学大学院博士課程でベンガル文学を専攻していた。レッスンは、月曜から金曜まで、毎朝8時から10時まで、シュミタさんの自宅で行われた。シュミタさんの父上は、ヴィシュヴァ・バーラティ大学の歴史学担当の教授で、レッスンのあとのお茶の時間にはしばしば同席された。父上はわたしの研究に興味を示され、わたしたちの会話はいつもは

ずんだ。こうして、わたしのベンガル語能力はめきめき上達し、2ヵ月目には日常会話に何の不自由も感じなくなった。3ヵ月目には新聞が読めるようになり、手紙も書けるようになった。

わたしのリサーチ・アシスタントは、モロイ・ムケルジー君というベンガル人青年である。モロイ君は、山下さんの学生だった。彼は、大学で化学を専攻し、卒業後、ヴィシュヴァ・バーラティ大学日本学科で日本語の勉強をはじめたばかりだった。モロイ君は、日本語も英語も上手でなかった。しかしそのことは、わたしのベンガル語の会話能力を向上させるには好都合だった。

わたしがベンガル語を習っていた最初の3ヵ月間、モロイ君には毎日午後1時に来てもらい、彼をトレーニングした。わたしは、インド政府の調査許可がおりてからインド入りするまでのあいだに、リサーチ・アシスタントのトレーニング・プランを作っていた。それは、アメリカの大学の教育システムをモデルに、わたしなりに改良したもので、1週間単位でトピックを選び、15週でアシスタントを特訓するという、かなりハードなプランであった。わたしは、イリノイ大学人類学部の学部学生用のテキストを数冊持参していた。わたしは、モロイ君にリーディング・アサイメントを与え、レクチャーをし、そのあとクイズをしたり、口頭で説明させたりした。わたしは、モロイ君が途中で挫折するのではないかと、何度も心配した。しかし、彼は実によくがんばって、わたしの期待にこたえてくれた。わたしは、3ヵ月という短期間で彼をトレーニングするのに、とりあえず成功した。

4ヵ月目からは、モロイ君はフルタイムのリサーチ・アシスタントとして、わたしと寝食を共にして働いてくれた。その間、日本学科の学生としては休学同然で、山下さんにもモロイ君にも、すまないことをしたと思っている。

シャンティニケートンに住み込んでしばらくすると、わたしのことを風のたよりで知ったバウルが、ちょこちょことわたしの家に来るようになった。83年と85年の予備調査で顔なじみになったバウルたちである。わたしたちは再会をよろこんだ。こうして半年もたたないうちに、わたしのバウルの人類学的研究のフィールドワークは、フル回転で動きだした。モロイ君のほかに、インタビューのテープ起こしをするパートタイムのリサーチ・アシスタントとして、ヴィシュヴァ・バーラティ大学の学生を3人雇った。

このように、おおくの人びとの献身的な協力のおかげで、わたしのフィールドワークは順調にすすんだ。ひそかに期待していたバウルのグルへの弟子入りもはたせた。いずれにせよ、恵まれた研究環境で、フィールドワークに専念できた本調査の1年半は、人類学者として、このうえもない幸せな日々であった。

一般に、文化人類学的な調査をすすめる戦略として、ふたつのちがった方法があるといわれる〔梅棹 1991: 417-418〕。その第1は「トランセクト法」とよばれるもので、「ひとつの地域を横断して、そのあいだの観察をもとに、全体のイメージを把握する」という方

法である。これによって、さまざまな事例をあつめて、全体像を把握することができるし、地理的な変異も観察することができるという。そして、その第2は「定点観測法」とよばれるもので、「現地の一ヶ所に居をかまえて、じっくりと腰をおちつけて、ながい時間をかけてその社会を観察する」という方法である。この方法は、季節による生活のうつりかわりや、社会構造の精密な観察に適しているという。

わたしの場合、予備調査はトランセクト法によっている。昼はバスや列車を乗継いで移動し、夜はホテルやロッジに泊まったり、あるいは寺院やアーシュラムに泊めてもらったりした。1987年以降の調査は、シャンティニケートンを本拠地とし家を借りたので、定点観測法のようにみえるが、調査対象のバウルを訪ねてずいぶん旅行した。1カ月のうち半月はバウルの住む村に出かけ、残りの半月は本拠地で資料を整理するという生活であった。したがって、長期間の文化人類学的調査では定点観測法を採用することがおおいのであるが、わたしの場合、ほかの人類学者のやり方とは、すこし様子がちがうようである。

1-5. ベンガル語のカタカナ表記

1-5-1. はじめに

ベンガル文字はベンガル語特有の音声をあらわすのに適している。ただベンガル語の長い歴史を反映して、現在、文字と発音に一部ずれが生じている [町田・丹羽 1990: 11] したがって、日本語で表記できないベンガル語の用語は、ベンガル文字に発音記号を併せて表記すれば、文字と発音のずれも示すことができる。しかしこれは、ベンガル地域が専門の研究者のみを対象とした研究論文であれば理想的であるが、あまり現実的ではない。その種の文字や記号に慣れていない専門外の読者をも対象にするならば、外国語はカタカナ表記にしたほうが親切である。しかし、カタカナ表記だけでは、ベンガル地域専門の研究者だけでなく、文化人類学や言語学専門の研究者や学生にとっても不十分な資料となってしまう。

そこで本報告では、本文中にベンガル文字や発音記号を使用することをできるだけ避け、外国語の語彙をカタカナで表記することにした。そして、一連のものとなる本報告の最後に「ベンガル語彙解説」をもうけ、そこに本文中にでてくる現地語の発音を記号で示すことにした。

現地語をカタカナ表記する場合、日本語にはない音をどのように書きあらわすかという問題に直面する。ベンガル語には中間母音があるし、日本語にはない子音（そり舌音など）や日本語では区別していない子音（無気音と有気音など）もあるので、一応の取り決めごとを明記しておく必要がある。

社会人類学者の宮本は、『ハヌノオ・マンヤン族』と題したエスノグラフィーのなかで、マンヤン語をカタカナ表記する場合、「できるだけマンヤン語の発音に忠実であること」、

「日本人の一般読者にとって発音銘記ともに容易であること」という二大原則をあげている [宮本 1986: 18-19]。本報告では「マンヤン語」を「ベンガル語」におきかえて、宮本の二大原則を踏襲する。宮本にならって、この原則から大きくはみでないかぎり、厳しいことはいわないことにしよう。

以下の取り決めごとに関して、『エクスプレス ベンガル語』の「文字と発音」[町田・丹羽 1990: 11-27] を参考にした。

[] 内は発音記号、「 」内は参考にする日本語の発音とカタカナ表記である。

1-5-2. 母音

ベンガル語には7つの母音がある。それらは [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] である。これらのうち [a] [i] [u] [e] [o] は、カタカナではそれぞれ「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」と表記する。

中間母音 [æ] は、「ア」と「エ」の中間の音である。「ア」を発音する要領で大きく口を開け、「エ」と発音する。日本人には「エ」に近く聞こえるので、カタカナでは「エ」と表記する。

中間母音 [ɔ] は、「ア」と「オ」の中間の音である。「ア」を発音する要領で大きく口を開け、「オ」と発音する。日本人には「オ」に近く聞こえるので、カタカナでは「オ」と表記する。

1-5-3. 鼻母音

各母音に対応する鼻母音 [ã] [ĩ] [ũ] [eñ] [õ] [æñ] [ɔñ] は、カタカナではそれぞれ「アン」「イン」「ウン」「エン」「オン」「エン」「オン」と表記する。

1-5-4. 長母音と短母音

ベンガル語では母音の長短は、文字では区別されているが、発音に際してはあまり重要ではない。一般的には、1音節語の母音は長めに、2音節以上の語の母音は短かめに発音される。長めに発音される場合は、カタカナ表記では長音符号「ー」で示す。

1-5-5. 子音

ベンガル文字を含むインド系文字の子音字の配列順序は、口の奥から唇に向かう各子音(破裂音、破擦音)の調音点のずれに沿っている。同じ調音点の破裂音、破擦音の各グループは5つの音(無声・無気音、無声・有気音、有声・無気音、有声・有気音、鼻子音)から構成される。

1-5-6. 無声音と有声音

この区別は、発音の際、のど仏のくぼみに指をあてると確認できる。声帯の振動を感じない音が無声音、感じる音が有声音である。日本語の「カ」と「ガ」、「パ」と「バ」の子音は、それぞれ無声音と有声音である。

1-5-7. 無気音と有気音

この区別は日本人には苦手である。発音できないからではなく、日常発音しているのに耳でも文字でも区別していないからである。無気音と有気音の区別は、薄い細長い紙の先端を口先2～3センチに垂らして発音すると確認できる。呼気が弱くあまり紙が揺れない場合は無気音である。呼気が強く紙が揺れれば有気音である。

有気音の記号を [h] で表すが、カタカナ表記では無気音と有気音の区別は無視する。

1-5-8. 鼻子音

ベンガル語の発音と文字のうえでは、各調音点ごとに計5種類の鼻子音が区別されている。しかし実用上は語中の「ン」と同じ要領で発音されるので、それぞれの鼻子音は記号で表すが、カタカナ表記では「ン」に統一する。

1-5-9. 軟口蓋破裂音のグループ [k] [k^h] [g] [g^h]

後舌を軟口蓋につけ、呼気を一瞬閉鎖して破裂させる音である。

[k] は無声・無気音、[k^h] は無声・有気音である。[k] [k^h] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」「ケ」「コ」と表記する。

[g] は有聲・無気音、[g^h] は有聲・有気音である。[g] [g^h] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」「ゲ」「ゴ」と表記する。

[ŋ] は、「タンカ」や「マンガ」など、直後にこのグループの子音がかかる場合の鼻子音である。カタカナでは「ン」と表記する。

1-5-10. 硬口蓋破擦音のグループ [c] [c^h] [j] [j^h]

前舌を上歯茎近くの硬口蓋につけ、呼気を一瞬閉鎖しその狭い隙間から擦って出す音である。

[c] は無声・無気音、[c^h] は無声・有気音である。[c] [c^h] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「チャ」「チ」「チュ」「チェ」「チョ」「チェ」「チョ」と表記する。

[j] は有声・無気音、[jʰ] は有声・有気音である。[j] [jʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「ジャ」「ジ」「ジュ」「ジェ」「ジョ」「ジェ」「ジョ」と表記する。

[ɲ] は、「ヤンチャ」や「ニンジャ」など、直後にこのグループの子音がかかる場合の鼻子音である。カタカナでは「ン」と表記する。

1-5-11. 歯音破裂音のグループ [t] [tʰ] [d] [dʰ]

舌の前部を上の前歯の裏に押しつけ、呼気を一瞬閉鎖し破裂させる音である。[ta] や [da] は、日本語の「タ」や「ダ」の舌先をもっと前にずらして発音する。

[t] は無声・無気音、[tʰ] は無声・有気音である。[t] [tʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「タ」「テイ」「トゥ」「テ」「ト」「テ」「ト」と表記する。

[d] は有声・無気音、[dʰ] は有声・有気音である。[d] [dʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「ダ」「デイ」「ドゥ」「デ」「ド」「デ」「ド」と表記する。

[n] は、「サンタ」や「カンダ」など、直後にこのグループの子音がかかる場合の鼻子音である。カタカナでは「ン」と表記する。[n] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、「ナ」「ニ」「ヌ」「ネ」「ノ」「ネ」「ノ」と表記する。

1-5-12. そり舌破裂音のグループ [t̪] [t̪ʰ] [d̪] [d̪ʰ]

日本語にはない音である。そり舌にした舌の先端を歯茎に近い硬口蓋につけ、呼気を一瞬閉鎖し破裂させる音である。[t̪a] や [d̪a] は、日本語の「タ」や「ダ」の舌の前部を意識的に後ろにずらか、そらすかして発音する。

[t̪] は無声・無気音、[t̪ʰ] は無声・有気音である。[t̪] [t̪ʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは傍点のついた「タ」「テイ」「トゥ」「テ」「ト」「テ」「ト」と表記する。

[d̪] は有声・無気音、[d̪ʰ] は有声・有気音である。[d̪] [d̪ʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは傍点のついた「ダ」「デイ」「ドゥ」「デ」「ド」「デ」「ド」と表記する。

[ŋ̪] は、直後にこのグループの子音がかかる場合の鼻子音である。カタカナでは「ン」と表記する。

1-5-13. そり舌反転者 [ɟ] [ɟʰ]

日本語にはない音である。反り舌音 [ɟ] を発音するように舌の前部を硬口蓋に近づけ

たあと、舌先を上前歯の先に向けて放す。[ɾa] は、日本語の「タ」と「ラ」の中間の音に聞こえる。

[ɾ] は無気音、[ɾʰ] は有気音である。[ɾ] [ɾʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは傍点のついた「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」「レ」「ロ」と表記する。

1-5-14. 両唇破裂音のグループ [p] [pʰ] [b] [bʰ]

上下の唇で呼吸を一瞬閉鎖し破裂させる音である。

[p] は無声・無気音、[pʰ] は無声・有気音である。[p] [pʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「パ」「ピ」「プ」「ペ」「ポ」「ペ」「ポ」と表記する。

[b] は有声・無気音、[bʰ] は有声・有気音である。[b] [bʰ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」「ベ」「ボ」と表記する。

[m] は、「サンボ」や「タンボ」など、直後にこのグループの子音がかかる場合の鼻子音である。カタカナでは「ン」と表記する。[m] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば「マ」「ミ」「ム」「メ」「モ」「メ」「モ」と表記する。

1-5-15. [r] と [l] の区別

[r] と [l] の区別は日本人には苦手である。日本語では発音でも、耳でも、文字でも区別していないからである。それぞれの音は発音記号で示すが、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」「レ」「ロ」と表記する。

1-5-16. 摩擦音のグループ [ʃ] [h]

ベンガル語の3種の子音字、すなわち「タルボ・ショ」（口蓋音のショ）と「ムルドンノ・ショ」（そり舌音のショ）と「ドント・ショ」（歯音のショ）の表す子音は、いずれも [ʃ] である。[ʃ] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「シャ」「シ」「シュ」「シェ」「ショ」「シェ」「ショ」と表記する。

[h] に、母音 [a] [i] [u] [e] [o] [æ] [ɔ] がともなえば、カタカナでは「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」「ヘ」「ホ」と表記する。

1-5-17. [ʃ] が [s] と発音される場合（その1）

[ʃ] は、強制的に子音のみの発音となる結合文字の場合、直後に [t] [tʰ] [kʰ] [n]

[r] [l] がくると [s] になる。

1-5-18. [ʃ] が [s] と発音される場合 (その2)

[ʃ] は、語頭で母音 [a] をともない、直後に [d] [dʰ] がくると、しばしば [s] に聞こえる。たとえば、本研究と関連のふかい「サドナ」「サドゥー」「サドク」「サディカ」などがそうである。

1-5-19. サンスクリット起源の語のカタカナ表記

サンスクリット起源の語で、カタカナ表記が定着している語については、原則として慣例に従う。たとえば、「ダルマ」(dharma) や「アルタ」(artha) や「カーマ」(kāma) や「マントラ」(mantra) などである。

サンスクリット起源の語で、ベンガル語の発音にしたがってカタカナ表記する場合は、定着している表記があれば、初出時にそれもあわせて記す。たとえば、「ドルモ」には「ダルマ」を、「オルト」には「アルタ」を、「カーム」には「カーマ」を、「モントロ」には「マントラ」を、それぞれ併記する。

参考文献

Bhattacharya, Jogendra Nath

1995 *Hindu Castes and Sects*. Reprint of 1896 edition. Calcutta: Firma K.L.M.

Bhattacharya, Upendranath

1958 *Bānglar Bāul o Bāul Gān*. Calcutta: Orient Book Company.

1981 *Bānglar Bāul o Bāul Gān* (new edition). (『ベンガルのバウルとバウルの歌』)

Calcutta: Orient Book Company.

Bhattacharya, Deben

1969 *The Mirror of the Sky*. London: George Allen & Unwin LTD.

Bose, Manindra Mohan

1986 *The Post-Caitanya Sahajīā Cult of Bengal* (reprint ed.). Delhi: Gian Publishing House

Capwell, Charles H.

1974 'The Esoteric Beliefs of the Bauls of Bengal.' *Journal of Asian Studies*. 33(2): 255-264.

1986 *The Music of the Bauls of Bengal*. Kent, Ohio: The Kent State University Press.

Chakravarti, Surath Chandra

1980 *Bauls: The Spiritual Vikings*. Calcutta: Firma K.L.M.

Chatterji, Suniti Kumar

1986 *The Origin and Development of the Beagali Language* (reprint ed.). Calcutta: Rupa & Co.

Das, Matilal and Piyushkanti Mahapatra (eds.)

1958 *Lālan Gītikā*. (『ラロン・ファッキールの詩歌』) Calcutta: University of Calcutta.

Dasgupta, Shashi Bhusan

1969 *Obscure Religious Cults* (3rd ed.). Calcutta: Firma K.L.M.

Datto, Aksay Kumar

- 1870-71 *Bhārotīyo Upāsok-samprodaye*. (『インドの熱狂的な宗派』) Calcutta.
- Dimock, Edward C., Jr.
1959 'Rabindranath Tagore-The Greatest of the Bauls of Bengal.' *Journal of Asian Studies*. 19(1): 33-51.
1966 *The Place of the Hidden Moon*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Dumont, Louis
1960 'World Renunciation in Indian Religions.' *Contribution to Indian Sociology*. No. 4, pp. 33-62.
1970 *Homo Hierarchicus*. Chicago: The University of Chicago Press.
1998 *Homo Hierarchicus* (Complete Revised English Edition). New Delhi: Oxford University Press.
- Karim, Anwarul
1980 *The Bauls of Bangladesh*. Kuchitua, Bangladesh: Lalan Academy.
- 小西 正捷
1974 「バウルの歌 ベンガル民衆の宗教詩」『みすず』No. 177: 10-20。
- Mahapatra, Piyushkanti
1972 *The Folk Cults of Bengal*. Calcutta: Indian Publication.
- Mansur-Uddin, Muhammad (ed.)
1942 *Hārāmanī*. (『失われた宝石』) Calcutta: University of Calcutta.
- McDaniel, June
1989 *The Madness of the Saints: Ecstatic Religion in Bengal*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 町田 和彦・丹波 京子
1990 『エクスプレス ベンガル語』白水社。
- 宮元 啓一
1992 「バクティ」『南アジアを知る辞典』544-555頁、平凡社。
- 宮本 勝
1986 『ハヌノオ・マンヤン族—フィリピン山地民の社会・宗教・法—』第一書房。
- 村瀬 智
1999 「バウル群像—ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究(1)」『大谷女子短期大学紀要』No. 43: 113-137。
2000 「バウル群像—ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究(2)」『大谷女子短期大学紀要』No. 44: 45-93。
- 大西 正幸
1984a 「『絶対』の降る場所(1)」『春秋』No. 255: 5-8。
1984b 「『絶対』の降る場所(2)」『春秋』No. 256: 13-16。
1984c 「『絶対』の降る場所(3)」『春秋』No. 257: 19-11。
1984d 「『絶対』の降る場所(4)」『春秋』No. 259: 24-27。
1984e 「『絶対』の降る場所(5)」『春秋』No. 260: 24-27。
- Ray, Manas
1994 *The Bauls of Birbhum*. Calcutta: Firma K.L.M.
- Salomon, Carol
1979 'A Contemporary Sahajiya Interpretation of the Bilvamangal-Cintamani Legend as sung by Sanatan Das Baul.' In *Patterns of Change in Modern Bengal*, edited by Richard L. Park, pp. 97-110. East Lansing: Asian Language Center, Michigan State University.
- Sen, Kshiti Mohan

ベンガルのバウルの文化人類学的研究(1)

- 1931 'The Baul Singers of Bengal.' Appendix 1 to Tagore's *The Religion of Man*. pp. 207–220.
New York: Macmillan.
- 1949 *Bānglār Bāul*. (『ベンガルのバウル』) Calcutta: University of Calcutta.
- 1956 'The Mediaeval Mystics of North India.' In *Cultural Heritage of India*. Vol. 4, edited by Haridas Bhattacharya, pp. 377–394. Calcutta: Institute of Culture, The Ramakrishna Mission.
- 1961 *Hinduism*. Penguin Books.
- Sen, Sukumar and Tarapad Mukhopaddhaye (eds.)
- 1986 *Sri Sri Caitanyacaritamrit* of Krishnadas Biracita (Kaviraja). (『チヨイトンノ不滅の生涯』)
Calcutta: Ananda Publishers Private Limited.
- Tagore, Rabindranath
- 1922 *Creative Unity*. London: Macmillan.
- 1931 *The Religion of Man*. New York: Macmillan.
- Thákur, Robíndronáth
- 1905 *Bāul*. (『バウル』) Calcutta.
- 梅棹 忠夫
- 1991 「民族学におけるフィールドワーク」『梅棹忠夫著作集 第10巻』409–432頁、中央公論社。

キーワード：カースト、カースト制度、世捨て、マドゥコリ、ベンガル、バウル。

Keywords: caste, caste system, renunciation, begging, Bengal, Bauls.